

ITP-EUROPA 派遣報告書

博士後期課程 横田さやか

派遣期間 平成25年4月20日～平成25年8月11日

派遣先 ボローニャ大学（イタリア）

指導教員 和田忠彦教授

受入教員 エレナ・チェルヴェッラーティ教授
(Elena Cervellati)

研究テーマ イタリア未来派の舞踊

派遣(研究)の概要

1909年の創立宣言によって生まれたイタリアの前衛芸術運動未来派が創作した舞踊を研究の対象としている。とりわけ、Aerodanza「航空ダンス」(1931年)を踊ったバレリーナ、ジャンニーナ・チェンシ(Giannina Censi 1913-1995)に注目し、その作品を通じてモダン・ダンスの歴史に於ける未来派ダンスの位置付けと重要性を考察する。

本派遣期間中は、上記の研究テーマを論じる博士論文を脱稿し、派遣先研究機関であるボローニャ大学に提出し、その最終審査を受験する。

派遣期間中の研究成果

報告者は、2010年度より ITP-EUROPA 派遣のもと、共同指導共同学位授与制度に則してボローニャ大学芸術学部博士課程映画・音楽・演劇専攻に留学し、研究活動に専念してきた。本派遣期間中の研究課題は、博士論文の脱稿、提出、そして審査をつつがなく遂行することであり、それは全派遣期間を総括する研究成果になるといえる。

派遣開始時から5月半ばにかけては、博士論文脱稿へ向けて執筆作業の最終

段階に入った。データ上での執筆作業を終了した後、仮製本を繰り返し、加筆修正を重ねた。ボローニャ大学における指導教員には最後までご指導を仰ぎ、内容についてのご指導のみならず、様式の面でも質の高いものに仕上がるよう細やかに注意をいただいた。とくに、膨大な量のカラーイメージ資料を含むため、読み手の側に立った図録と註の配置方法等についてもご指摘いただき、最後の最後まで改良を重ねた。本学指導教員からは、最終段階ではケアレスミスのないように、誤植等に気を配るよう注意を受けており、幾度もそれを思い起こしながら最大限の注意を払い見直し作業を行った。

5月末にボローニャ大学大学院課へ博士論文を提出したのは、すみやかに最終試験の準備に移行した。博士論文の内容を口述することは、執筆作業とはまた異なる言語運用能力を必要とするものであり、書く作業から気持ちを完全に切り替えて訓練を重ねる必要があった。まず、博士論文を始めから読み直し、節ごとに要約を作成した。それをもとに、内容ごとに口頭で要旨を説明する練習をした。試験対策について周囲に話を聞いてみると、イタリアでは、筆記試験よりも口述試験が重視され、どの学生も経験を積んでいる為、それぞれの口述試験対策を身に着けていることがわかった。一方で、筆記試験に慣れている報告者の場合、最終審査においてハンディとなるのは、言語能力以前に、まず口述試験の経験不足であることがわかった。この頃には、積み重なる疲労と緊張感のためもはや余力すらも残されていなかったが、経験不足を精神面で補えるものは訓練のみであると判断し、要旨を口述する練習を繰り返した。

最終審査は、6月27日、ボローニャ大学芸術学部において実施された。両学の指導教員のほか、外部からは、ローマ大学のシルヴィア・カランディーニ教授、そしてボローニャ大学を退官されたエウジェニア・カジーニ・ローパ教授がいらしてくださり、審査委員会は合計4名で構成された。報告者による博士論文のプレゼンテーションに続き質疑応答がなされ、無事に博士号（映画・音楽・演劇学）を取得した。

その後、帰国までの期間は、休む間もなく国際シンポジウムにおける研究発表と、日本での学会発表の準備に取り組んだ。博士論文の内容から題材を選び、要旨を作成する作業を進めた。9月には、本学「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」のもとモスクワにおける国際シンポジウムにおいて、10月には、イタリア学会年次大会において、研究発表を行う予定である。派遣最終月の成果は、博士号取得後、研究発表や論文発表を積極的に進めてい

くにあたり、着実にその一步を踏み出したことであるといえる。

今後の課題

博士論文を執筆したことで、ようやくスタート地点に立ったことを実感する。目下の課題は、可能な限り機会を生かして学会や学術シンポジウム等で研究発表と論文発表を行うことである。並行して、一次資料研究を更に進めていくつもりである。博士論文では、一次資料への明確かつ細やかな言及、引用が評価されたが、この研究テーマに関わる未だ十分に考察されていない資料がまだあると思われ、ぜひともその分析調査作業を進めたい。